HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	支えあう子育て活動と親の学習過程：さっぽろ子育てネットワーク活動と親たちのエンパワーメント
Author(s)	河野, 和枝
Citation	社会教育研究, 20, 37-53
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28541
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_P37-53.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

支えあう子育て活動と親の学習過程

—さっぽろ子育てネットワーク活動と親たちのエンパワーメント—

河　野　和　枝

1，問題意識と課題の設定

(1) 問題意識

今日全国には28を数える「子育てネットワーク」が結成され，その活動内容や組織形態が報告[1]されているが，その多くは子育て中の母親たちが自主的に組織し活動しているのが実態である。しかし『こころの子育てインターねっと関西』(1995年設立）のように，子育てやサークル・ネットワークづくりなどを支援するNGO団体もある。また公民館の援助のもと活動歴史のある『貝塚子育てネットワーク』(1988年設立）は，地域の育児サークル・小学生・中高生グループの3部会構成で活動している組織であり，保健所・保育所などの公的機関や父親も巻き込み活動をつなぎ，《地域ぐるみの子育て活動》に発展させ，その後につくられる「子育てネットワーク」のモデル的存在ともなり大きな示唆を与えているが特徴は，自主活動と公民館事業の「親育ち」の学習が連携している全国的にも類のない民間と公的教育機関の地域子育て活動であり注目されている。

このようなさまざまな「子育てネットワーク」活動が生み出される要因を見てみる。1960年代以降の高度経済成長政策のもと，都市化が進み新しい地域で生活をする核家族が増加していった。農山村などでの地域共同体がもっていた，子育て知恵の伝承や子育てをささえていた人間関係は希薄となり，相俟って男性労働者をささえるため性別役割分担を強固とした家族形態の転換政策は，専業主婦の増加をもたらし母子だけの子育てに拍車をかけていった。「母子密室子育て」といわれる孤立化した子育て状況は「親子ストレス」[2]による子ども虐待などさまざまな社会病理ともいえる現象さえ発生させることになり，子育てすることの困難さが際立ち少子化現象の一要因にもなっている。この子育て不安状況が多く持ち込まれたのが保健所の保健婦たちの所であった。子育て仲間を作ってあげたい，同じ悩みを分け合い子育てを楽しいと思えるよう援助してあげたいと，母子サークルづくりを手掛けたことに端を発し育児サークルが各地域に作られ広がって行った。一方母親たち自身も子育て仲間を求め友達グループを中心にどこからも援助を受けず，自主的に育児サークル化したものや子育て情報誌を媒介に，地域活動として育児サークル化したものなどさまざまな発生形態で育児サークルがつくられていった。

2001年3月国立女性教育会館職員を中心に作られた子育てサークル研究会は「子育てサークル活動に関する調査」を実施報告している。報告から見えてくる育児サークルの現状は楽しい子育て環境を自分たちの手で作り上げてはいるものの，援助者もなく親子あそびを中心とする活動は，学

習や他の活動に発展する可能性が少なく，子どもが一定の年齢になると解散する完結型活動形態とも言える。

育児サークルが抱えるこのような現状から，個々のサークル間をつなぎ単位サークルではできない活動を展開したり，交流や情報交換で互いの活動を発展させたり，あるいは地域の子育て団体をつなぎ子育て状況を変える役割として「子育てネットワーク」が生まれ，今日にみる数に発展したとみることができる。その発生経緯の内実は，育児サークルにしても子育てネットワークにしても，ある獲得目的をもつ運動組織として意識的に作られたというよりも，母親たちの個別の子育て要求に導かれ必要に迫られ，自然発生的に作られて行ったと見る方が妥当であり，新しい子育て組織と言えるだろう。

さらにエンゼルプラン(3)施策実施後，前掲のタイプに限らず行政など公共団体が子育て支援の目的で，教育・福祉・医療などの担当課や子育て支援専門職員などを束ね，縦割り行政を越えた子育てサポートシステムを構築したりと，今日ではさまざまな内容をもつ「子育てネットワーク」が公的機関，民間などで組織されているのが実態である。

(2)　課題の設定

子育てネットワーク活動の可能性について増山は「協同と安心の子育てをもとめて人と人とつながる地域づくり」さらには「子育てネットワークの活動をてがかりに，より総合的な子育てビジョンを構想し政策化し新しい子育てシステムづくりへ」と述べている。(4)また，山本は「机上の学習を越える“子育ての見通し”を学べる組織」(5)とし，恒吉は「地域を再編する主体形成を可能にし，すなわち自己疎外の克服としての子育てネットワーク（自己実現）」(6)と述べている。

特に増山は，60～70年代に全国各地で取り組まれた，新しい子育て文化運動が担った子育て環境を再構築する地域づくりを高く評価し，地域の子育て運動と協力・連携しながら子育てネットワークをつくることが大切とし，運動概念をもった組織として捉えていたり(7)福祉・医療・家庭・文化・学校・行政など領域別のネットワークとして整理を試み，総合的なとりくみへの足掛かりとして捉える(4)など子育てネットワーク論を発展させ，その論理展開は今日の子育てネットワークの可能性や理念，基本的視点を示唆する意味では高く評価される。しかしいづれも子育てネットワーク組織が担う可能性を論じたものであって，子育てネットワークの実践活動や学習展開の内実，かつ活動の多くを担う親たちの活動力量・子育て力量の形成内実について明らかにされているとは言えない。社会教育行政と連携した「貝塚子育てネットワーク」の「親育ち」の実践が多く論じられているが，今日のさまざまな子育てネットワーク活動が自然発生的にできた新しい子育て組織であることを踏まえ，組織論だけに終わらせず「親育ち」の実践論の確立が課題であろう。

本論では，1995年設立した「さっぽろ子育てネットワーク」の活動を事例にとりあげる。設立の中心であった恒吉は，このネットワークの特徴を「市民による手づくり・運動ではなく活動・さ

まざまな人達で構成・社会参加を可能にする」[8]と規定しているようにさっぽろ子育てネットワークは，前述した全国で活動している子育てネットワークとは違いのある組織と活動形態をもち，特に「親育ち」の課題を中心に据えた活動を展開していることに注目し，設立以来の活動展開過程を分析し，職域・領域を越えた人々がつながりあう市民組織がもつ固有の意義と役割，活動を担う子育て親たちの自己教育活動と獲得する親育ちの力量形成の内実を個別事例をもとに明らかにすることを目的とする。

また本論では，親たちが形成する力量を「エンパワーメント」と捉え分析の視点に据える。今日「エンパワーメント」という言葉は，1995年開催された第四回世界女性会議（北京会議）において権利の獲得と行動を示す表現として「女性のエンパワーメント」＝「力をつけること」と提起され目標とされたことで，その概念がひろく普及されるに至っている。この概念は女性のあらゆる活動場面に応用され意義づけされているが，本論にそって二つの概念規定を挙げる。鈴木は「主体形成に類似したコンセプトにエンパワーメントがある。そこには単に主観的に『主体』となるというだけでなく，現実的な環境や社会関係を変革し創造していくこと，そしてそのために必要な力量の形成をすることが含まれているから，そのような意味におけるエンパワーメントを『主体的力量形成』と訳してきた」[9]鈴木は，獲得力量が内面的なものを指すことに傾きがちな概念規定を，行動に転化して獲得するものとひろげている。すなわち力量領域を権利の意識から権利の獲得として意義づけていると言える。野々村は「女性のエンパワーメント獲得過程は，社会教育のなかで女性たちが行ってきた営みそのものであり，こうした学習と実践によってエンパワーメントは可能になる」「女性というひと括りのマスではなく個別のニーズに応えなければ本当の意味でのエンパワーメントにはならない」[10]と実践による「エンパワーメント」を明らかにしている。子育ては人間形成を担う普遍的かつ社会的固有の意義をもつ営みである。その営みに参加することで得られる親のエンパワーメントを仮説に置き分析する。

また本論で言う自己教育活動とは，学習の主体であるばかりでなく学習を組織する主体となることであり，エンパワーメントはその活動を含みながら得られる力量形成を言う。

2，さっぽろ子育てネットワークの活動と展開過程

本論では，さっぽろ子育てネットワーク（以後ネットワーク）活動の展開過程を第一期（1995設立～1997），第二期（1997後半～1998），第三期（1999～2001）と3つの時期区分をし分析する。

(1) さっぽろ子育てネットワークの概要

ネットワークは「子育て・親育ち・子育ち」をキーワードに，乳幼児期から青年期まで見通しながら子育てができるよう，地域で支えあう子育て環境をつくりひとりぼっちの子育てをなくそう

と，親をはじめ子育てや教育・福祉などに関わる団体や個人で組織された市民のネットワークグループである。15団体180名の個人が組織され，子育て学習を中心に社会的活動を展開し，乳幼児を育てる若い母親の個人会員が増え続けている現状にある。活動を組織する主体は総会で選出される運営委員である。

(2)　さっぽろ子育てネットワーク活動の展開過程

第一期は，1995年度設立から3年間である。準備会での学習でネットワークとはどのような活動をしていくのか，全国の実践例などで少しの知識は得ていたものの活動経験のない市民団体は，特別なネットワーカーも援助もなく自分たちの力量で活動を創りあげねばならなかった。親たちの子育て困難という現実に向き合い「札幌で子育てしてよかった」と思える地域にしたいと理想も大きかった。しかし運営委員の活動経験や力量，動機や意識もそれぞれに違いがあるなかのスタートは，若い母親たちが中心となり創りあげた最初の活動「子育て交流フェスティバル」では，準備段階の手順や事務的不手際など活動の未熟さや会員同士の性格のぶつかり合いなど人間関係が深まっていないことによるトラブルも重なり，活動の達成感より疲労感を多く残す結果になって現れている。ネットワーク活動の内容が定まらないなかでも，子育ての学習が先ず必要と取りくまれたフォーラムでは，子育てしやすい地域や社会づくりが必要と課題を共有する活動も生み出されている。2年目子育てハンドブック「このゆびとまれ」の発行は，マスコミにも多く取り上げられ，ネットワークがひろく市民に知らされる契機となっているが活動や学習の内容は，外に向けて発信するというよりも会員同士がそれぞれの活動を知り合い互いの関係を深めあう「会員どうしの熟成活動」とも言えるもので終わっている。3年目に入り，「子育て講演会」「子育て交流会」など会員外に開かれた活動を展開しているが，日常活動は2年目同様，会員内部だけのしかも一部の参加者に固定化し広がりのない自己満足的な活動展開となっていったことで，ネットワーク活動の危機的不安を抱えたり展望をもちたいというあせりが一部の運営委員のなかに現れる活動状況に直面している。

このように第一期の活動展開は，初めて出会う人々がともに活動することで生まれる葛藤やネットワーク活動に確信や展望がもてずに試行錯誤が続く活動から，子育て環境や状況を変えていくような実践活動は生み出されてはいない。運営体制においても運営委員を増やし会議の定例化を推進し充実させてはいるが，活動日のスタッフ不足や会報の充実も十分とは言えず，一部の運営委員が活動を担う行き詰まり状況を迎えた時期でもあるが，団体や個人会員同士のつながりを重視した活動からは，年度を経るごとに会員の関係が深まりそれぞれが抱える悩みや課題を知り合うことで，子育て活動の思いを共通認識にして行く活動過程がありこの時期を「設立期」と特徴づけられる。

第二期は，「第14回子育て・文化協同全国交流研究札幌集会」（以後全国集会と言う）を創りあげた時期である。開催決定をめぐり徹底した議論をくぐり抜け，実行委員会の主要なメンバーとし

てネットワーク会員が担った役割は大きいものだったと同時に，会員の学びの場にもなっている。特に分科会づくりでは，地域の子育て実践を掘り起こしたり，子育ての知見をひろげたり，自らの問題意識を明確にしたりと集会づくり過程そのものが学びの場になり，活動や学習することの意味を深める経験を重ねている。全国集会づくりは，全国の子育て実践から学んだり，さまざまな場面で子育て仲間や子育て活動実践家たちと出会い子育ての輪を広げている。よって第二期は，ネットワーク活動の現状を新たに捉らえ直したり，新たな課題設定ができたり，問題意識を明確にできたり，子育て仲間の存在を広く意識できたりしたことで活動に確信がもてるようになる契機となった活動展開であり「質的転換期」と言うことができる。

第三期は，全国集会を創り上げた若い母親会員が新しく運営委員に加わり，グループ別分担活動を取り入れた時期である。活動内容も対象を乳幼児をもつ親たちに絞り，子育ての苦悩や育児サークル課題に直接アプローチする学習展開をみせ，これらの活動過程で多くの若い母親たちとむすびつきを広げていっている。

「きいてきいて私の育児ストレス」活動に象徴されるように，若い運営委員の問題意識と重ねて同じ悩みをもつまわりの母親たちを活動に組織しながら課題の解決に導く学習活動を展開している。「子育てサークル応援講座」でも，育児サークルがもつ活動上の課題解決をめざす学習内容に焦点を絞り活動を発展させている。初めての経験となった「札幌市子育て推進課との懇談会」では，当事者の考えや思いを子育て支援施策に生かしてほしいと提案し，ネットワークが地域の子育て課題に目をむけ子育て環境を変える行動に踏み出した画期的な活動と言える。これらの活動は，子育て支援策が推進され与えられる支援の内容が問題になっているなかで，親育ちを課題の中心に据えつながりあいながら協同の子育てを生み出し，自分たちが望む子育て環境をネットワーク活動を通して自分たちの力で主体的に創りあげたものであり第三期は，ネットワーク活動が子育て状況や環境を変えて行く実践を主体的に創り出した活動展開であり「自立的展開期」と言える。

以上それぞれの時期のネットワーク活動は，子育て課題を共通認識にした第一期の「設立期」，活動が確信となる第二期の「質的転換期」，地域に目を向け子育て環境を変える活動を展開した第三期「自立的転換期」と質的に変化させた活動展開と言える。

3，さっぽろ子育てネットワークの活動と親たちの自己教育活動

次にさっぽろ子育てネットワーク活動をささえた親たちの自己教育活動を分析する。2，で述べたようにさっぽろ子育てネットワーク活動は，第一期の設立時から多くの課題を抱えながら活動を展開している。それぞれの活動時期により担った親たちの役割に違いがあり，自己教育活動の内容も異なっていると仮定することができる。ここではその時々の活動をささえた親たちを事例にとりあげる。親たちの年齢・入会前の活動経歴・担った役割の活動時期を下記の表に表す。

氏　名	年　齢	入会前の活動歴	第一期 1995～1997 （設立期）	第二期 （質的転換期） 1997後半～1998	第三期 （自立的転換期） 1999～2001
Oさん	43歳	食物アレルギーの会	○	○	
Wさん	43歳	学習グループ	○	○	○
Tさん	45歳		○	○	
Sさん	39歳	育児サークル		○	○
KNさん	43歳	育児サークル		○	○
OOさん	35歳	育児サークル			○
Cさん	37歳				○
SWさん	45歳	幼児教育を考える会			○

(1)　第一期（設立期）第二期（質的転換期）の親たちの自己教育活動

［事例：Oさん］

Oさんは，ネットワーク設立に深く関わったひとりである。設立のきっかけとなった「社会教育を語る会」の参加で，それまで活動していた「食物アレルギーの会」との違いを発見している。癒しの会では得られない広がりのある人間関係と活動への理解者の存在は，生きる勇気をもらえるところと実感し，健全な食生活は子育ての基本であるとネットワーク活動の意義を見いだし設立準備会から積極的に関わっている。

ネットワーク活動最初の取り組みになった「子育てフェスティバル」では，初めて出会いしかも活動経験の少ない若い会員達との間に，取り組み姿勢や意識の差異を感じ葛藤を抱え，活動経験のある同年齢の会員とも問題意識や活動スタイルの違いを感じながらも，ネットワーク設立第一歩の活動を成功させたいと主体的にとりくみ目的を達成し，女性たちの視点で作り上げた活動になったと評価し実績にもしている。若い母親たちとの関わりも同じ子育て仲間であると認識を深め，活動は学習であると待つ姿勢に変化させながら，事務局・ニュース担当を担いながらつながりあう活動の確立を積極的に推進している。

またTN事務局長や幅広い層の人達と対等な立場で議論できるネットワークは，自分の言動を確認し活動への自信を深める場，相互に影響し合える関係とつながり意識を明確に捉えるようにもなっている。Oさんにとって第一期の活動は，試行錯誤する初期のネットワーク活動をささえ，組織を確立させる役割を中心的に担った自己教育活動と言える。

第二期では，第一期の後半から現れた停滞気味の活動を意識し改善するためには子育ての輪を広げる必要がある，ネットワーク組織がもつさまざまな人材を集会で生かすことはネットワーク活動をささえる人が広がると，全国集会開催決定には誰よりも積極的姿勢を示し，決定後も分科会づく

りなど活動推進の役割を担ったひとりである。

Oさん自身「挑戦する行動が確実な足跡を残した」と言うように全国集会づくりでは，活動準備過程に起こるさまざまな問題を対処する方法を学び，ネットワーク活動のやり方が見えてきた感じがしたと活動から得られた内容を語っている。全国集会づくりは，ネットワーク活動が直面していた危機を脱する契機や活動を新たな確信につなげるものになりその役割を担ったOさんの自己教育活動である。

［事例：Wさん］

Wさんは，学習グループでの活動の物足りなさから子育て問題を外に発信したり重層的な人達の集まりで社会的な問題として考えあいたいとネットワーク活動に参加している。この間発行した「子育てハンドブック」に，公共施設での子育て環境調査結果を発表したり「子育てフェスティバル」では，イベント的な活動だけに終わらせたくないとネットワークに参加する団体などの活動を紹介する“展示コーナー”を創る提案をし実現したことで自らの役割を見いだす契機にしている。その後のフォーラムや講演会など学習活動のとりくみでは，子育てを社会的に捉えようとする自らの問題意識をみんなのものと重ねながら学習内容にくみたてる活動に積極的に関わる姿勢に変化させ，ネットワークらしい活動にこだわりを見せている。しかし子育て学習では，社会化されない子育て観が母親OBたちのなかにもある現実社会の課題にぶつかり活動の大変さを感じたり，仲間との活動スタイルの違いからこの先一緒に活動が出来るのかと不安を抱えたりもしながら，さまざまな人たちと出会い活動を創りあげるなかで，自らのもつ問題意識が共感され支持され自分たちの手で活動が創り上げられることに自信を深め，これらの課題を払拭させる契機にしている。Wさんにとって第一期の活動は，自らの問題意識である子育て観をみんなのなかで学び直し，ネットワークらしい活動を創り上げる役割を担った自己教育活動と言える。

第二期の全国集会開催決定では「子育てフェスティバルの時のように大きな活動は問題を抱え込むことにも成りかねず不安がある」と慎重な姿勢を取っている。活動停滞状況にあるとの見方に対しても，会員内部でじっくり学習することも大切であるとし，ネットワーク活動は先に何かがあるのではなくみんなで活動しながら創りあげるものであるからそういう時期もあると捉えられていた。しかし全国集会の歴史を知る学習や地元主体の活動が保証されることが魅力となり開催姿勢を変化させ取り組みに加わっている。

分科会づくりでは，ジェンダー問題が過去の集会で学習課題になっていないことに気づき，子育て課題の重要点であると位置付け実践したことは札幌集会の特徴と評価され，その過程では，活動仲間の意識変革にも影響を与えている。保育体制づくりでも，活動経験で蓄積したノウハウを生かしながら役割を発揮し，さまざまな人達と出会い活動をともにしたことは，自分が鏡に映し出されよく見えプラスになったと経験を評価し活動への自信を強める契機にしている。第二期のWさんは新しい学習分野の分科会づくりと保育体制づくりに役割を担った自己教育活動と言える。

［事例：Tさん］

Tさんは「なかよし子ども館」を存続させたいとひとりで行政に掛け合うなどしてきたが，ひとりの力の弱さを感じ仲間が必要とネットワーク活動に関わっている。「なかよし子ども館」は結果として廃止となったが問題意識を共有する人達と出会い活動を始めている。保育士をしていたこともあり子どもの育つ環境や子育てについての関心が強く，若い母親たちを支えたいと活動では仲間づくりに役割を担っている。設立時から事務局を担当し，子ども連れの会議に自宅を解放したり若い母親たちの子育て相談役になったりと「楽しい活動にならないと長続きはしない」ことをモットーにしている。活動することで子どもが犠牲になるのでは意味がないと仲間の子育て観の違いを感じ批判的な意見をもったり，一部の人が先んじる活動では若い母親たちはついてはいけないと子どもをもつ親たちの活動であることにこだわっている。この間の活動ではOさん・Wさんとともに活動を創る中心的な役割を果たしながらも事務処理や保育などネットワーク活動を裏からささえる役割に重点をおいて関わっている。「裏方にまわると学習ができなく損に思うこともあるけれど，時にはそういう役割をする人がいなければネットワーク活動は成立しない」と役割を認識している。小出まみ氏の「子育て講演会」では，自ら率先して講演依頼をするなど活動を創り上げる積極的な姿勢で役割を担っている。「協同のための北海道集会」に参加し子どもたちの育ちの場としての地域を深く認識し，協同することの意味を学習している。Tさんの第一期の自己教育活動は，会員どうしの仲間づくりを担いつつ保育などネットワーク活動をささえる役割であったと言える。

第二期の全国集会決定では「仙台集会に参加した経験はあったが，大きな集会は面倒と思うところもあり受け身的な姿勢だった」と言う。しかし参加経験を伝えたりしていくなかで集会のイメージも出来，決まったことは楽しく関わろうと姿勢を変えてもいる。分科会づくりを担い実践報告を掘り起こす活動の中で「集会の実態がつかめず理解出来ない」と言われ報告を渋る団体とのトラブルに出会い対応するなかで，集会の意義や分科会づくりの役割を深く捉え再認識している。また集会当日，分科会助言者の発言に対しても「未熟な活動が報告されたとしても活動を励ます助言であってほしい」と批判し，自らも子育て活動の意味を問い直す契機にしている。Tさんにとって全国集会づくりは，分科会づくりに役割を担うことでこれまでのネットワークをささえる役割から学習活動を創りあげる役割に変化させた自己教育活動と言える。

この間をまとめると，第一期はネットワーク活動を創り上げるという命題をもった時期であり，活動経験の蓄積もなく活動する会員も初めて出会う人ばかりのなかで，それぞれの持つ経験を出し合うことから活動は始まっている。互いの思い・考えを出すことで問題意識を共有し確認しあいながら活動をつくりあげている。そのなかで個々の子育て観や活動意識の違いもわかり葛藤しながらも，新しい活動づくりに役割を見いだして行くことが3人の事例からも解る。Oさんはネットワーク活動の確立に役割を担いWさんはネットワーク活動らしさにこだわり学習活動に役割を担

いＴさんは仲間づくりに役割を担いそれぞれの自己教育活動があり，会員どうしが学び合いながら子育て課題を共有しあうネットワーク活動づくりとなっている。第二期は，第一期の試行錯誤の偶然性が生み出した活動で積み残された問題（活動の行き詰まり状態）の解決を求めて展開されている。やれるかどうか不安を抱えながらも全国集会に活動の発展を託す決断をしての集会づくりは，活動をとおして全国の子育て仲間から子育て課題を解決する活動の内容や活動を創り上げる方法など多くを学び，その結果ネットワーク活動に確信がもてるようになったと言える。Ｏさん，Ｗさん，Ｔさんはそれぞれ分科会づくりに役割を担って活動を広げている自己教育活動であるが，経験をとおして活動のノウハウを蓄積させ展望を見いだす活動と言える。

(2) 第三期（自立的転換期）の親たちの自己教育活動

この期をささえたＳさん，KN さん，Ｗさん，OO さん，Ｃさん，SW さんについて分析する。活動歴はそれぞれ７年，５年，４年，３年，２年と経験も一様ではなく，動機もそれぞれ育児サークルで出来ないことやつながりのひろさを求めて，育児サークルの経験を広めたい，育児サークルの経験を生かしたい，同じ悩みをもつ人とつながりたい，ネットワーク活動を知りたいなど目的が違っている。

［事例：Ｓさん］

Ｓさんは設立時からネットワーク活動に参加している。初めて出会った会員たちとの間で活動方法や意識の違いなど葛藤を抱えながらも，積極的に活動に加わりネットワーク活動を経験し，イベントとは違うネットワーク活動の意義を見いだしている。

第二期の全国集会づくりでは「難しいことはわからない」と傍観的な姿勢で参加しながらも，ジェンダー問題の学習で自らの問題意識に気づき分科会づくりに積極的に関わるようになり，ネットワークでの自分の役割を意識するようになっている。

第三期の活動に入り，乳幼児グループを担当し「きいてきいて私の育児ストレス」を創りあげる中心的役割を担いながら，ネットワークでの自らの役割を明確なものにしている。この活動を契機に参加者に声かけスタッフを増やし活動体制を広げながらパートⅢまで学習を組織し，子育て課題を解決する役割を担い発展させている。その後も若い母親たちが中心となって活動展開する「親子ファミリィコンサート」「札幌市子育て推進課との懇談会」「子育て講演会」などで，若い母親たちを活動に組織し新しいネットワーク活動を定着させる原動力なったＳさんの役割は大きいものがある。自らもこの間の学習活動の中で子育て観や子育て姿勢を変える契機にもしている。この間の活動は，子育て仲間を組織しながら子育て状況を変える活動をともに創り上げるというネットワーク活動の新しい分野を切り開き，第一期が招いていた活動の広がりや自信のなさを克服する役割を担う一人でありまた自らの活動姿勢を能動的に変えていく自己教育活動を導きだしている。

［事例：KN さん］

KNさんは，第二期の全国集会では分科会づくりにTさんとともに関わっている。自らも育児サークルの実践報告しネットワーク活動の意義を深める活動にしている。

第三期に入り乳幼児グループのリーダーになり，育児サークルの経験から得た若い母親がもつ子育ての悩みを学習内容に生かし，Sさんとともに「きいてきいて私の育児ストレス」の活動を創り上げる役割を担いっている。特に「札幌市の子育て推進課との懇談会」活動では大きな役割を発揮している。自らも問題意識をもち，育児サークル会員や親たちの要望・意見をとりまとめ子育て支援が当事者のものになっていない問題点を整理し，行政に提案するという子育て環境を変える活動を生み出し，自らも声を出し行動することは子育て環境を変えて行くことにつながると学んでいる。「親子ファミリィコンサート」では，地域の育児サークルとの協同活動を新たに生み出し，子育て地域を変える活動を多く担ったKNさんの自己教育活動である。

［事例：Wさん］

Wさんは，第一期の活動経験から得た育児サークルのかかえる活動課題が解決されるような活動にしたいと「子育てサークル応援講座・サークル交流会」を他の運営委員とともに取り組み，育児サークルを組織し学習や交流で課題解決に結び付ける活動を創りあげている。ネットワーク活動が育児サークルへの援助活動に発展させた役割を担っている。

［事例：OOさん］

OOさんは，全国集会に参加し分科会でKNさんの活動報告を聞き，自らの経験を生かし育児サークルを支援する活動がしたいとネットワークに入会している。ニュースづくりの編集委員になり育児サークルの経験記事を載せたり活動の悩みに応えたりと，子育て情報を充実させている。また新しい活動であるネットワークのホームページ開設では，得意分野であるパソコン技術を生かしスタートさせるという重要な役割を担って活動を発展させている。OOさんは，第一期からネットワークの課題であった子育て情報活動の不十分さを克服する役割を担った自己教育活動であると言える。

［事例：Cさん］

Cさんは，新聞記事で「聞いて聞いて私の育児ストレス」活動を知り参加したことがきっかけとなり，スタッフに誘われ活動に加わっている。自分と同じ悩みをもつ母親たちとの出会いは子育ての不安感をとりのぞく契機になり，東京での子育て学習とネットワークでの子育て学習の違いに気づきつながりあうネットワーク活動の意義を見いだしている。Sさんのように子育てしながら生き生きと活動している姿に影響を受け，自らの子育て姿勢を変えてもいる。2001年度「子育て講演会」で，初めて主体的にかかわり活動を創る側の経験をしている。多くの子育て親に講演会に参加してもらいたいと宣伝活動などSさんたちとともに積極的に行動し子育て学習を組織する役割を担っている。活動するなかで仲間の存在を喜びをともに分かち合える存在として意識化し，その後も「ママたちの子育て井戸端サロン」などSさんたちとともに乳幼児グループの活動を担う中心

的な一人として役割を果たし自己教育活動を展開している。

［事例：SW さん］

SW さんは，高知市での子育て活動の経験がありネットワーク活動を作りたいと思っている矢先に札幌に転居し，児童会館でネットワークを紹介され活動に参加している。教育団体の呼びかけで開催となった「子育て・教育・文化フェスティバル」の実行委員会にネットワークが初めて参加することになりSW さんは，実行委員として主体的に活動参加しその役割を担い，教育現場の実情を知り学校に親の思いが伝わらない現実を理解したりと自らも学びながら教育や学校を変えるには学校と父母をつなぐ組織と活動が必要であり，その役割がネットワークにあると活動の意義を捉えている。子育てと教育をつなぐ活動が初めて実現し，その活動を組織する役割をSW さんが担った自己教育活動と言える。

第三期は，事例で明らかなように若い運営委員によって新しい活動が次々と創り出され，子育ての輪を広げている。この間新しく活動にかかわった運営委員の事例も含め，それぞれが果たした役割を明らかにしながら自己教育活動を分析した。なぜこのような活動展開に発展していったのかその要因をまとめてみる。

①若い運営委員のなかには設立以来の活動経験をもち，さらには全国集会づくりの経験で活動に対する自信と確信ができ，活動を創りあげる方法なども学んでいたこと

②若い運営委員をささえる他の運営委員たちにも，全国集会を経た活動の蓄積がネットワーク活動の展望を見いだしともに活動をつくりあげる姿勢になっていたこと

③運営委員会の活動組織を活動別担当グループにわけたことで乳幼児グループの活動に責任をもつ若い運営委員が出来たこと

④新しい会員をスタッフに誘いともに活動を創りだす仲間づくりが意識化されたこと

⑤運営委員メンバーが新しく増えるたびに問題意識の違う人や活動分野のセミプロと言えるような人が加わり，ネットワーク組織が従来より多様性のある集団にひろがったこと

第三期の活動はこれらの要因が相互に関連し，これまでの活動形態を打ち破り子育て課題を解決する活動に発展している。このことはＣさんの言う「横並びの関係の良さは企業にはない人間関係，子育てしていてもＳさんのようになれる」に象徴されるようにつながりあう対等の人間関係（ともに活動を創造する協同の関係）のなかで，私的個別の子育て要求の活動から子育て環境を変える「親育ち」の活動に発展していることがわかる。従って第三期は，とも育ち「親育ち」の自己教育活動と言え第一期の個別の子育て課題を共有する活動，第二期の確信・自信となる活動との質的違いと発展が明らかである。

4，さっぽろ子育てネットワーク活動と親たちのエンパワーメント

前節では第一期から第三期までのさっぽろ子育てネットワークの活動を通し，その活動を創り上げた親たちの自己教育活動の展開をみてきた。ここでは，活動にかかわった親たちが活動をとおして，どのような力量を形成されているのかを，1，で述べた「エンパワーメント」の先行論文の内容を論拠にしながら「親たちのエンパワーメント」の実相と内実について明らかにしたい。3，で事例にとりあげた運営委員のなかからOさん・Wさん・Sさん・Cさんの4名に焦点をあて分析する。

分析の前に会員の力量形成の条件となっている「活動」についての意味から捉えてみたい。ここでの「活動」とは「活動を創る」という意味でありそれを担う人がいて初めて活動が創るに転じて行くと言うことになる。また「活動」とは何を指しているかということである。ネットワークの「活動」は主に「学習活動」を基礎にしながら社会的活動も展開していると捉える。事例に取り上げた4人はすべて運営委員という役割をもった人であり，一般会員とは区別される。一般会員の多くは「活動を創る」場面には登場せず活動が創られた後に参加する会員である。運営委員は「活動」を創りあげ組織する役割をもつことで力量形成条件が一般会員よりは増幅されると言うことができる。4人の事例からは，力量形成の内実は一様とは言えず個別性がみられ，活動動機，活動を担う役割，学習活動の内容，活動仲間とのかかわりによって形成過程と内容の違いになって現れている。その内実を次の表にまとめてみた。

	Oさん	Wさん	Sさん	Cさん
(1) 活動動機 と 力量形成	・つらい子育てを変えることが出来た	・社会と関わりながら子育てが出来るようになった	・人とつながり交わりが出来るようになった	・孤立感がなくなり子どもと向き合えるようになった
(2) 活動役割 と 力量形成	・子育て悩みを共感し連帯出来た ・子育て活動が確信になった ・社会を変える活動につなげている	・親子で育ちあうことにつながった ・主体的に活動を創ることが出来た ・活動に主体的にかかわれるようになった ・活動の公共性を意識することが出来た	・活動のなかでの役割が自覚出来た ・活動に責任がもてるようになった ・共感し仲間を援助することが出来るようになった	・子育てをふりかえり自信が出来た ・同じ悩みをもつ親と共感することができるようになった ・公の場で自分の子育てを語れるようになった
(3) 学習と 力量形成	・自分を振り返りがんばれる力が出来た ・子育てを見つめ直すことが出来た	・子育てを問い直すことが出来た ・女性の権利意識がもてるようになった ・問題疑問を解決出来るようになった	・子育て姿勢を振り返り変えることができた ・子ども観子育て観を変えることができた ・子育て問題に広い視野をもつことができた ・性別役割分担など女性差別を意識出来るようになった	・子育て観を変えることができ早期教育に批判出来るようになった
(4) 活動仲間 と 力量形成	・自分の言動をふりかえられるようになった ・ささえあう関係をつくれるようになった ・勇気をもって人生の選択が自らできた ・生きていく意味をつかむことができた	・自分を確認したり検証することが出来た	・自分が認められ評価されることで自信になった	・横並びの関係のひとりでいたいと活動姿勢を変えることができた ・子育てしていても自分らしく生きられることに確信がもてた

(1) 活動動機と力量形成

ＯさんとＣさんは，安心して子育てができるささえあう社会づくりをめざし行動していることから，政治的な力量を育てていると言えるだろう。Ｗさんとさんの力量形成は，さまざまな人とつながりあい活動を創造する連帯性や協同性である。活動動機である個別の要求を活動をとおして実現させることは自己実現の力量形成でもある。

(2) ネットワーク活動の役割と力量形成

活動の役割を担うことは，活動の意義を深く捉えたり組織内での自らの役割を自覚することになり，活動への確信を深めたり責任行動が自らとれる力量を形成しながら活動仲間との信頼関係を生み出し，協同して行動する力量形成と言える。同時に活動がもつ社会的役割を認識し，公共性を考える意識も獲得されていっている。また子育て仲間と課題を共感できる関係は，連帯し代弁者となる力量を形成している。

(3) ネットワークの学習活動と力量形成

学習活動では，多くは子育て問題を広い視野で捉らえることができ，自らの子育て観・子ども観を変える力量が形成されている。また子育ての学習活動から性別役割分担がもつ女性差別の問題意識にもひろがり，自己決定や自己実現の力量を形成しさらには権利意識が獲得されてもいる。

(4) 活動仲間とのかかわりと力量形成

職域・領域を越えたさまざまな人々がつながっているネットワークは，活動や対等な関係での議論をとおし，相互に認め合い高め合う共育ちの固有の人間関係が創り上げられている特長を見ることができる。そのなかで自らの子育てや生き方を相対化し振り返ることが出来たり，互いを尊重するささえあう関係も生まれ子育ての安心も得られている。それまでの同じ領域・同質の集団がもつ閉鎖性から解放され，自由に自分らしく生きることを可能にする力量形成と言える。また共育ちの人間関係は，ともに活動をつくりあげる協同の力量も形成していることが解る。

このように４人の事例から，それぞれに形成された力量の内実を見てきたが結論を先にいうならば，子育てや人生を他人まかせにせず自らの意志決定でつかみ取る力量が活動をとおして形成されていると言える。子育てにおいて言うなら，競争原理や商業主義にまどわされず自分なりの子育てを確立する力量であり，人生においては夫や性別役割分担など社会の習慣に任せず，自らの決定で生き方を選び取って行く姿勢の力量である。このことはＯさんの言う「親育ちから社会を変えていく力になるはず」に象徴される「親育ち」そのものの力量形成と言える。

このことを明らかにするため，ネットワーク活動のなかでの力量形成の経緯を見てみると，活動

動機は我が子の子育てや自分の要求からと私的・個別の要求で関わり，さまざまな人達とのつながりで子育ての安心感を得，コミュニケーションが出来る関係を構築する。さらに学習や活動によって子育て力量を高めあい，我が子から他の子たちを視野に入れる子育て意識が形成され，子育て状況を変えて行く姿勢に変化させる過程が「親育ち」であり，この過程は4人の事例をとおしても見られる。

これらの過程では関わる人間関係が大きく影響していることも明らかであるがネットワークの人間関係が(4)で述べたとおりであり，その関係性に裏付けされ可能にしているとも言えるだろう。

ここでは，4つの領域でそれぞれ形成される力量を明らかにしたが，実際は個別領域で区分されるものではなくそれぞれが重なり合い関係づけられて力量を形成し，しかも「活動」という実践行動をとおして得られているのである。

鈴木・野々村の「エンパワーメント」の概念を用いても，ネットワーク活動を通し親たちの形成するさまざまな力量，すなわち「エンパワーメント」が認められそれは「子育て」という固有の内実を含みながら，親どうしともに育ち合う活動のなかで形成する「親育ち」の「エンパワーメント」と整理することができる。またそれらは精神としての「エンパワーメント」＝権利の意識を越え，活動のなかで形成し活動に返し子育て環境を変えるという行動から得られる「エンパワーメント」＝権利の獲得に向かうものと捉えることができ，ネットワーク活動が現段階で生み出していると言えるのではないだろうか。

5，まとめと課題

5－1　まとめ

ここまで活動の展開過程，活動と親たちの自己教育活動，活動から得られた親たちのエンパワーメントをそれぞれ分析してきた。テーマである「支えあう子育て活動と親の学習過程」に即してまとめると次のような結論になる。

私的個別の子育て要求や意識で「子育て・親育ち・子育ち」のキーワードのもとネットワークに結び付き活動と学習を積み上げる活動は，親たちの個別の子育て力量を高めるばかりでなく，子育てそのものを自らのものにし子育て環境を変える主体かつ自らの人生を選択する主体として形成する親のエンパワーメント活動であると言える。この活動には従来の子育て活動「協同の子育て」で得られる集団としての力量形成ばかりでなく，個人の力量形成においても有効な活動であることが明らかになった。

それを可能にしている条件は，ひとつにネットワーク組織がもつ固有の人間関係にある。“同質ではない，領域別ではない，同年齢ではない”多様な人々がつながりあう組織のもと，人々が互いに支え合い影響し合いながら人として育ち合う承認作用に基づく人間関係があることである。

もうひとつは，学習活動にある。この間の学習活動を整理すると，活動と学習内容の相関に3つの学習展開構造をみることができる。ひとつは，子育てサロン・子育てフォーラム（交流会）・子育て支援を考える会などは，親と親・親と子育て専門家をつなげ人間関係を深めたり子育て力量を高めるなど，親自身の子育て創造の学習活動である。二つ目は，子育てサークル交流会・応援講座などで，サークル間をつなげ仲間づくりで子育ての楽しさを分かち合える場にし活動を豊かに発展させるものであり，サークル活動創造の学習活動である。三つ目は，子育て講演会・子育てフォーラム・子育て交流会などで，団体と団体・地域の人々をつなげ子ども観・子育て観を共有する場であり，子育て・子育ちのためのささえあう環境づくりの学習になり，地域子育て活動創造の学習活動である。

ネットワーク活動の基礎的組織要素である《団体・サークル・個人》をつなぐ役割と学習展開の実際が関係付けられ，これら3つの学習構造が織り成す相互作用が親としての力量形成に有効に働いているといえる。

5－2　さっぽろ子育てネットワーク活動の課題

(1)　組織的課題

1，親育ちの課題にあわせた活動の取り組みで育児サークルや子育て親の組織化をはかる。

2，子育てと教育を結んだ活動で学齢期・思春期の親たちの組織化をはかる。

第3期（自立的展開期）において子育て母親に焦点化した活動の展開はみたものの，まだネットワーク活動の定着度をみたとは言いがたい。団体・サークル会員のひろがりも設立以後伸びてはいない。育児サークル会員に至っては設立時のままか解散の団体もあり減少している。その反面，子育て中の母親の個人会員は活動毎に増えているという今日の組織状況がある。その個人会員もほとんどの多くが育児サークルに入り活動しているメンバーである。地域では育児サークルの数も増えその分，参加者の活動も増えているはずである。にもかかわらずネットワークに活動の場を求めて加入してくる要求の実態をていねいに分析する必要が残されていると言える。

この間の活動では「親子ストレス」を乳幼児をもつ親自身の子育て課題として活動の場面で捉え，若い母親会員を増やす結果となったが，その要求だけで組織するのでは不十分であろう。育児サークルの内実と親自身の持つ子育て問題をさらにリアルに把握し組織化を進めなければならない課題がある。また子育ては子どもの育ち・成長とかかわり親に求められる子育ての力量がある。特に今日の子育て困難は，乳幼児を持つ親と同じように教育の現場から起こる閉塞状況のなかにいる親たちにもさまざまに現れている。さらには成人になっても自立できずに親たちの悩みを増大させている現状と照らし，乳幼児と教育を結び付けての活動の展開がどうしても必要となっている課題である。教育団体との協同で実行委員会を組織し教育問題への活動は一歩進めた状況であるが自らの固有の課題としての取り組みは出来てはいない。運営委員や会員のなかには多くのPTA活動に

かかわっている実態からしても子育てと教育＝親たちと学校の関係の個別性と統一性を見据えた固有の活動が急務と言え，その組織化の可能性と展望を持たなければならないであろう。

団体・サークルのつながりの課題である。今回の聞き取りでも学童保育所連絡会のKIさんから出された課題で，団体同士つながり合うことの意義を再確認したいとの意見でもある。団体から捉らえるネットワーク活動の固有の意味である。この間会員団体の活動を知りたいとフォーラムなどで報告してもらったが，この点での活動は全く組まれてはいなくそこからしてもひろがる要因とはならない活動状況にもなっていると言わざる得ない。組織課題として今後に残されているがこれらは学習課題でもある。

(2) 学習の課題

1，親育ちの学習に子どもの成長発達理論を取り入れ子ども理解を深める。

2，父親をまきこむ活動をとりくみ，ともに親育ちができる環境をつくる。

前段の組織課題と大きく重なる分野でもある。重複することは避け次の2点に絞る。ひとつ目は子どもの成長発達を保障する課題である。この間出会った若い母親たちが口にすることに「子どものことを理解出来ない。なぜ泣くのか，なぜぐづってばかりいるのか，何をどうしてあげればよいのか，どう向き合ってよいのかわからず思案にくれ，いらだちがどんどん積もって行く」など「わかってあげたい，きっと何かがあるのだろう，でもわからない」と育児書にくびっきりの状態になるという。

アンリ・ワロン（『身体・自我・社会』浜田寿美男訳ミネルバァ書房1983）は，子どもの形成過程を月齢，年齢別に分け捉らえている。特に情動表現とのかかわりで子どもと大人の関係が形成環境として重要であることを述べている。すなわち子どもの情動により大人が子どもに関与し，子どものあらゆる欲求をかなえてくれることから，さまざまな大人との連合がおこり，おとなたちの存在を想起していくことになる。情動は人間どうしの生きている環境のなかで欠かすことのできない共同性の働きの基盤をなすものと規定している。このことから乳児であっても，大人の存在はミルクをもらえる相手なのではなくミルクをもらえる関係と捉えられなければならない。

前述のような親たちの子育て姿勢では子どもの形成過程での情動を通しての親子のコミュニケーションは困難になる恐れが出てくる。この理論に学んでも，親育ちの学習に子どもの成長発達理論（系統学習）取り入れ，マニュアル子育てからの脱却を図らなければならないだろう。

次に父親の学習課題である。ネットワークは父親の組織活動をまだ展開していなく課題として残されているが，同時に父親自身の子育て学習が急務な必要課題であると言える。母親たちは子育て学習からジェンダーを学び自らの生きづらさに立ち向かっている。男性においても同じような課題が含まれていると考えられる。性別役割分担さえ気づかない男性たちとどう子育てを担っていけるのか。子育ての辛さはここに大元があることが多いことからしても父親対象の子育て学習を展開さ

る必要がある。

(3) 地域づくりへの課題

1，子育てしやすい地域づくりを進める。

2，子育てビジョンの作成で地域子育て支援体制を充実させる。

この間と取り組みのなかで子育てハンドブックづくりの過程に見られるように，若い母親たちが地域に出向いて子育て環境調査を実施したり，子育て学習のなかでも子育ての課題と地域を結び付けて考える機会もつくられた。また地域子育て支援の実態を把握し行政との懇談会を自ら積極的に要請し実現している。しかし，これらの活動も単発的なものに終わり継続的に子育てと地域づくりを捉え実践活動を展開して行くものにはなっていなく，ネットワークの地域づくりの構想は練られていない現状である。

子どもたちが多様な大人たちとかかわりながら生活し人として育ち合う地域と，親たち自身活動するなかで地域がもつ子育て機能の大切さを認識していく過程があり，活動と学習の実践がその意識を再構築して行く可能性を導き出している。これらの活動をさらに発展させ，子育てしやすい札幌の街づくりをネットワークとしてどのような展望をもつのか，他の団体などと協力・協同しながら進めなければならない課題である。

地域づくりとかかわって地域子育て支援体制をどう創って行くかの課題がある。現在行政の子育て支援関係者との連携がとられつつあり，この連携を基礎にひろげながら親たちと住民たちとともに子育て支援の内容を充実させ子育てが安心して営まれるような地域づくりが課題である。

注

(1) こころの子育てインターねっと関西編『ひろがれ！　子育てネットワーク』2001，3

(2) 汐見稔幸著『親子ストレス』平凡社新書 2000

(3) 1994年「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」（旧文部・厚生・労働・建設4大臣合意）の通称，少子化対策を基本に据えた子育て支援総合対策プラン

(4) 増山均『子育て新時代の地域ネットワーク』大月書店　1992

(5) 山本健慈『ひろがれ！　子育てネットワーク』こころ子育てインターねっと関西編

(6) 神田嘉延・遠藤知恵子・宮崎隆志編著『生涯学習を組織するもの』北樹出版 1997

(7) 増山均『地域づくりと子育てネットワーク』大月書店 1986

(8) 1994，12　設立準備会中間総括より

(9) 鈴木敏正著「エンパワーメントの教育学」北樹出版 1999

(10) 野々村恵子・中藤洋子著「女たちのエンパワーメント」国土社 1997